

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00265

研究課題名(和文) 外地メディアからみる女性作家の自己表象 『台湾愛国婦人』を中心に

研究課題名(英文) Self-Representation of Women Writers in the Foreign Media: Focusing on "Taiwan Aikoku Fujin"

研究代表者

下岡 友加 (Shimooka, Yuka)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・准教授

研究者番号：30548813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究成果は主に以下2点にまとめられる。

1、『台湾愛国婦人』の常連寄稿者であった尾島菊子、国木田治子、加納幽閑子たちのテキストを検討し、彼女たちが外地で自身の代表作とも位置づけられる自己表象テキストを発表していたことを内地媒体への発表内容と比較するなかで明らかにした。また、新資料の紹介により、旧来の彼女たちの著作年表を補った。

2、『台湾愛国婦人』は台湾総督府の政策履行、特に「山地討伐事業」を後援するための官製プロパガンダ誌であった。そうした媒体の性格に資するテキストを女性作家たちが寄稿することで互いの共存が図られるという、いわば協働関係が成立していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、帝国日本が統治初期台湾において刊行した官製プロパガンダ誌『台湾愛国婦人』という新資料に基づいて、女性作家たちの寄稿内容を内地媒体のそれと比較しながら具体的に明らかにした。各女性作家たちの著作活動の内実を詳らかにしただけでなく、従来一般には知られていなかった、明治末から昭和期にかけて活躍した女性記者の文筆をも追跡して明らかにした。女性作家・記者と植民地政策との関わりを明らかにした点で、日本近代文学研究のみならず、女性史、ジェンダー研究、日本近代史、台湾史、植民地研究、雑誌メディア研究等に資する新たな知見をもたらしたと言える。

研究成果の概要(英文)：The results of this study can be summarized in the following two main points.

1) I examined the texts of Ojima Kikuko, Kunikida Haruko, and Kano Yukashi, who were regular contributors to "Taiwan Aikoku Fujin," and clarified that these women published "self-representational" texts in the "Colony of the Japanese Empire" that could be regarded as their representative works, by comparing them with their publications in the "Japanese Imperial Inner Territories" media. This Study also supplements the chronology of their writings by introducing new materials. 2) "Taiwan Aikoku Fujin" was a government-manufactured propaganda magazine to support the policies of the Taiwan Governor-General's Office, especially the "mountainous lands defeat project". This study revealed that the women writers contributed texts that contributed to the nature of such a medium, and that a cooperative relationship was established in which mutual coexistence was sought.

研究分野：日本近代文学

キーワード：尾島菊子 加納幽閑子 国木田治子 愛国婦人会台湾支部 ジェンダー 山地討伐 加納豊 編集者

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、研究代表者の台湾在住時(2002~2004年)に端を発する。研究代表者は日本統治初期台湾発行の稀覯本『台湾愛国婦人』(愛国婦人会台湾支部、1908年10月~1916年3月。全88巻)の重要性に気づき、資料探索と研究を継続してきた(平成24年度~平成26年度科学研究費補助金・基盤研究(C)課題番号24520217、研究代表者・榎原修、研究分担者・下岡友加、研究テーマ「『台湾愛国婦人』の資料的研究」、平成29年度~平成31年度科学研究費補助金・基盤研究(C)課題番号17K02452、研究代表者・下岡友加、研究テーマ「『台湾愛国婦人』の内容に関する多角的研究」)。その研究過程で2018年、奥州市立斎藤實記念館所蔵本発見により、『台湾愛国婦人』全88巻中、82冊分の所蔵が確認されるに至った。

國學院大學は文学部共同研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』(2014.2)、『同 本文篇・研究篇』(2015.2)を編み、『台湾愛国婦人』掲載作品のうち、作家全集未収録本文の一部翻刻と研究論文10本を収めた(うち、1本を研究代表者執筆担当)。ただし、この共同研究完了後の2018年に大量の雑誌新資料が発見されたため(奥州市立斎藤實記念館蔵56冊)未だ手つかずのままの資料が多く残されていた。

一方、これまで日露戦後の明治末から大正初期における女性の自己表象については、『青鞜』創刊(1911年9月)に象徴される「新しい女」が注目されてきた。代表的な成果としては、飯田祐子編『『青鞜』という場: 文学・ジェンダー・新しい女』(森話社、2002.4)、岩田ななつ『文学としての『青鞜』』(不二出版、2003.4)、新・フェミニズム批評の会編『明治女性文学論』(翰林書房、2007.11)等がある。しかし、同時期に刊行された外地の『台湾愛国婦人』のような媒体については資料自体が閲覧困難なこともあり、十分な検討がなされてこなかった。

また、『台湾愛国婦人』を発行した愛国婦人会台湾支部に関しては、竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 明治篇』『同 大正篇』(田畑書店、1995.12、1996.10)、洪郁如『近代台湾女性史 日本の植民地統治と「新女性」の誕生』(勁草書房、2001.11)等、台湾史・女性史・植民地研究からのアプローチがある。台湾支部が置かれた背景と植民地の運営において女性の果たした役割については参照すべき重要な研究であるが、いずれも機関誌である『台湾愛国婦人』の内容を分析するものではなかった。

2. 研究の目的

本研究は、日本統治初期台湾において発刊された女性雑誌『台湾愛国婦人』に基づき、女性作家たちの自己表象の具体相をつまびらかにするとともに、そこに寄稿された彼女たちの文学と植民地統治との関係性について明らかにすることを目的とするものである。

飯田祐子は、近代日本における「女性作家が注目を集めた四つのピーク」のうち、「第二」のピークを「1906年頃からの数年間、つまり日露戦争から大正初期にかけての時期」(「文学場における女性作家」『アジア・ジェンダー文化学研究』第4号、2020.6)と指摘している。当該時期は、「作家が自分自身を登場人物として造形した小説」が増加しはじめた時期でもあった。日比嘉高はこれらの小説を自己表象テキストと名付けて、この期に顕著となる自己へのこだわりの傾向を指摘した(『自己表象の文学史 自分を書く小説の登場』翰林書房、2002.5)。では、当時の社会の一部を形成していた女性には、どのような自己表象が見られるのか。

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

従来、この「第二」期の女性作家の活動は平塚らいてう創刊の『青鞥』(1911年9月～1916年2月。全52巻)を中心に、もっぱら内地刊行の雑誌・新聞・単行本によって把握されてきたが、本研究は台湾総督府の統治政策履行のための広告塔の役割を果たしていた『台湾愛国婦人』に多くの女性作家たちが寄稿していることに着目し、同誌を明治末から大正初期における女性作家たちの外地媒体における活動を検討する資料として活用するものである。

3. 研究の方法

本研究では、主に次の1、2の方法に基づき、研究目的を果たす。

- 1 『台湾愛国婦人』常連寄稿者である女性作家・尾島菊子、国木田治子のテキストを中心に検討し、彼女たちの自己表象の在り方を明らかにする。その際、内地媒体への発表内容と比較を行い、彼女たちの文学と媒体(日本の植民地統治)との関係性について考察を行う。
- 2 『台湾愛国婦人』常連寄稿者の女性作家であり、記者でもある加納幽閑子のテキストを中心に検討し、全く履歴が明らかになっていない彼女の基本情報、並びに自己表象の在り方を明らかにする。その際、内地媒体への発表内容も調査し、比較を行う。また、本誌編集者・加納豊との関わりについても明らかにし、彼女のテキストと媒体(日本の植民地統治)との関係性について考察を行う。

上記の考察の最終段階においては、同時代の内地メディアにおいて活躍していた女性作家でありながら、本誌に寄稿の見られない作家(たとえば田村俊子)や男性作家の自己表象との比較も行い、『台湾愛国婦人』における女性作家たちの自己表象とその機能をより明確化する。以上の考察の成果を複数の論文として提出するまでを本研究の研究範囲とする。

4. 研究成果

本研究期間の成果として、編著書1冊、雑誌論文5本(査読中の論文1本を含む)学会発表5回が得られた。まず、編著書である下岡友加・柳瀬善治編『『台湾愛国婦人』研究論集 帝国 日本・女性・メディア』(広島大学出版会、2022.3)では、研究代表者は「はじめに」において、『台湾愛国婦人』の基本的性格をまとめるとともに、これまでに確認されている各巻所蔵機関について一覧表を作成し、明示した。また、本書で研究代表者が担当執筆した第一部第二章の論考「『台湾愛国婦人』掲載・西岡英夫「生蕃お伽話」」では、外地在住の日本人の台湾観について論じている。本書は本研究課題以前に準備されたものであるが、本研究課題遂行の礎と位置づけられる資料である。他の研究者7名による研究成果とともに、『台湾愛国婦人』に関する論考を書籍のかたちで公にできたことは、社会への研究成果還元の一つの方法として意義あることと考える。

雑誌論文では、以前から追跡調査していた『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の履歴について生没年を含めて明らかにすることができた。豊の出身地である兵庫県丹波市柏原町での二度にわたる現地調査等を通じて、彼が芦田均(第47代内閣総理大臣)の友人であることを突き止め、芦田の日記から情報を得て、豊の子息の墓を確認することができたのは大きな成果である(『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前/以後 『芦

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

田均日記』を補助線に「『国文学攷』2021年12月、第251号)。ここから、彼とおそらくは夫妻の関係にある加納幽閑子の調査への糸口も得た。彼女は『台湾愛国婦人』終刊後に再び内地に戻り、様々な媒体に膨大な寄稿作品・記事を残している。明治期から昭和期にかけて約30年にわたる執筆を続けた稀有な女性作家・記者であり、その活動を追跡し、著作一覧を作成できたことは、女性史にも寄与する成果と考えられる(「海を渡った女性記者・加納幽閑子『台湾愛国婦人』時代を中心に」『表現技術研究』2023年3月、第18号)。さらに、『台湾愛国婦人』の常連寄稿者であった尾島菊子は彼女の代表作と位置づけられるような自己表象テキストを同誌に寄稿していることを明らかにし、内地に寄稿された彼女の他の自己表象テキストとの間テキスト性についても詳らかにした(「書く女の誕生『台湾愛国婦人』掲載小説・尾島菊子「幼きころ」」『広島大学文学部論集』2022年12月、第82巻)。また、『台湾愛国婦人』に自身の最大数の寄稿を行っている国木田治子についても、寄稿されたテキスト18編の検討を行い、「夫を模倣する、文壇を侮蔑する『台湾愛国婦人』掲載・国木田治子のテキスト戦略」と題して、全国学会での口頭発表を行った(日本近代文学秋季大会、於北海道大学札幌キャンパス、2023年10月22日)。治子は戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問を目的とする愛国婦人会、また、現在進行中で「山地討伐」という戦時体制下にある台湾独自の事情を踏まえた上で、自身もまた「遺族」「未亡人」であることを示すテキストを寄稿したものと考えられる。この発表内容については、雑誌論文にまとめて査読誌へ投稿中である。

以上の通り、『台湾愛国婦人』掲載資料を中心に、女性作家(記者)の自己表象の様相、並びに、同誌を編んだ編集者に関する基本情報や日本の台湾統治政策との関わりを明らかにすることで、日本近代文学研究のみならず、女性史、ジェンダー研究、植民地研究、日本近代史、メディア史等に資する新たな知見を提供することができたと考えられる。ただし、本研究遂行期間はコロナ禍の影響のため、当初の予定通りには調査が実施できず、研究が大幅に遅延したことは否めない。また、『台湾愛国婦人』自体が大部の資料であり、著名な作家や知識人から全くの無名の寄稿者まで、数多くの執筆者を擁する上、広告、口絵、挿絵を豊富に掲載し、漢文欄をも持つ雑誌であるため、引き続き、今後も多角的多面的な研究アプローチが必要である。本研究の成果発表を通じて様々な研究者に関心を持ってもらい、各方面から研究を推進してもらえれば幸甚である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 下岡友加	4. 巻 82
2. 論文標題 書く女の誕生 『台湾愛国婦人』掲載小説・尾島菊子「幼きころ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学文学部論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/53508	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下岡友加	4. 巻 18
2. 論文標題 海を渡った女性記者・加納幽閑子 『台湾愛国婦人』時代を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 表現技術研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/53860	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下岡友加	4. 巻 251
2. 論文標題 『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前 / 以後 『芦田均日記』を補助線に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学攷	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下岡友加	4. 巻 26
2. 論文標題 犬 によって育まれるテキスト 志賀直哉文学における動物表象	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 有島武郎研究	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下岡友加
2. 発表標題 尾島（小寺）菊子「幼きころ」を読む
3. 学会等名 新・フェミニズム批評の会10月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下岡友加
2. 発表標題 『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の履歴再考 『芦田均日記』を補助線に
3. 学会等名 台湾史研究会7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下岡友加
2. 発表標題 海を渡った女性記者・加納ユカシに関する考察 『台湾愛国婦人』時代を中心に
3. 学会等名 日本出版学会秋季研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下岡友加
2. 発表標題 志賀文学と犬
3. 学会等名 有島武郎研究会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下岡友加
2. 発表標題 夫を模倣する、文壇を侮蔑する 『台湾愛国婦人』掲載・国木田治子のテキスト戦略
3. 学会等名 日本近代文学会秋季大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 下岡友加・柳瀬善治編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 広島大学出版会	5. 総ページ数 197
3. 書名 『台湾愛国婦人』研究論集 帝国 日本・女性・メディア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------